

---

# IS～インフィニット・ストラatos～別の世界の自分に憑依した青年の大活劇

かたがわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS→インフィニット・ストラトス→別の世界の自分に憑依した

### 青年の大活劇

### 【Zコード】

Z6593Y

### 【作者名】

かたがわ

### 【あらすじ】

ある日謎の穴に愛車と一緒に吸い込まれて別の世界の自分に憑依してしまった青年は、“IS→インフィニットストラトス”という女性にしか操作できない兵器を使える唯一の男性になってしまった。

そこで青年はいつたい何を見るのだろうか。

## オリジナルキャラ設定

氏家 達也

今作の主人公。IS学園の1年1組に所属。クラス代表。7月5日生まれ。身長は172cm。直死の魔眼所持。

使用車種“MR2・AW11”。

元走り屋で、日本中の峠を制覇していった“プロジェクトD”的ダウントンヒル担当の

エースドライバー。

引退した後も実力は衰えない、というより前よりも強くなっている。

今作では謎の穴に愛車ごと吸い込まれ、何らかの影響で別世界の幼い自分に

憑依してしまった。

頭の回転は早く、どんな危機でも必ず解決の糸を引っ張る。力もチートで、太陽系をも吹き飛ばす程の力を持つているが、普段はリミッターをつけている。

イケメンに加え人の心の機微に鋭く、境界線の無い優しさで女性をときめかせる

言動や行動を見せる事から学園の内外を問わず数多くの女子に好意を寄せられている。が、やはり主人公よろしく鈍感である。

御筆 秋夫

“プロジェクトD”リーダー。既に結婚済。20歳。

使用車種“スカイラインBMR32GT-R”。

達也を悪魔の道こと走り屋の道に誘つた奴で、20代のやらない夫と性格が似ている。

というか顔も形もほとんど同じだと思つてくれればいい。

クーガー達といつもつるんでいる。

前は日の出崎では最速の名を冠しているが、達也に破られている。

「巨乳メイドはロマンだろ常識的に考えて」

## ストレイト・クーガー

CV：津久井教生

文化的一枚目な兄貴。プロジェクトDヒルクライム担当エースドライバー。世界三大兄貴。

使用車種“ホンダS2000”だが「ラディカル・グッドスピード」

という

アルター能力を使用して車を再構成し、速く走らせることができる。（ただ、すつごくゴツイボディになる）

元暴走族特攻隊“ホーリー”の隊長。「速さ」と「文化」に異様なまでの執着を見せる奴。

彼にとつて速さは美であり、見事な早口で喋る。

速さを求め続ける誰もが認める最速にして、最強の兄貴。

そして、愛すべきバカ。

「俺が選んだ俺の道だ、それを最速で突っ走つて何が悪い！」

## カミナ

CV：小西克幸

プロジェクトDメカニック担当。天元突破兄貴。婚約済み  
使用車種“マツダ・RX-8”

物事は全て「気合い」で片付くと信じている精神論者。  
髪型ととんがつた真っ赤なサングラス、上半身に彫られたタトゥー  
が目印。

プロジェクトDの中では常識人だが常識人ではない。  
自らの命をかけてまで檄をかけ、死んでも檄を加える姿は正に漢（  
死んではいけないが）。

そしてバカ。

「お前を信じろ！俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺でもな  
い、お前が信じるお前を信じろ！！」

## ランサー

CV：神奈延年

プロジェクトDメカニック担当。敏捷性に優れた槍使い。通称・ラン  
サー兄貴。

真の名前はケルト神話の光の皇子クーフーリン。結婚済。

使用車種は“スバルインプレッサ・GC8 STIバージョン”

根は実直で、口は悪いが己の信念と忠義を貫く、英靈らしい英靈（  
今は人間）。

趣味は魚釣りやナンパだが、ナンパするたびに嫁さんに殴られる。  
「どーもーー青タイツでーす！」



## 第一話・プロローグ（前書き）

とあるスレのキャラの設定を使用せてもう一つ許可を取ったので投稿させてもらいます。

ただ兄貴達はまだ登場しませんのであしからず。

## 第一話・プロローグ

場所・何処かの草原

「秋夫よ……なぜ此処に？」

「たまたま此処に寄つただけだろ」

街外れの草原に寝転がっている青年は氣だるそうに隣に居る青年“御筆秋夫”に喋りかけた。

「……何かスリルな事が起きないのかね？」

「……それってフラグだろ」K

青年は露骨に“どつかの異世界に飛ばされるフラグ”を

立ててしまつたりした。

現時点ではそんなことは青年は知らないが。

「さて戻るか……秋夫はどうあるんだ?」

「……俺も戻るに決まつてゐんだら、純夏的に考えて」

彼ら達は立ち上がり、自身の愛車の置いてある場所に向かった。

「ついでに俺は“田家達也”ってこいつ前だから

「誰に話してるんだろう?」

「そりや読者様に決まつてゐんだらうが

「おく、把握しただる」

場所・日の出

「おっ、達也、久しぶりじゃねえか」

「よつ、ランサー、久しぶりだな」

「まつたく、風邪なんか自慢のドリルでぶち抜け！」

「無茶言つなカミナ、お前みたいにドリルなんかもつてねーしどう風邪をぶち抜けばいいんだよ」

「おい達也、風邪は最速で、美しく治すもんだぜ」

「お前も無茶言つなクーガー」

「ははっ、やつぱり俺達は揃わなきやだめだろ常識的に考えて

最速で治せといつてゐるは、スピード狂でアルター能力という物を持つ

世界を縮める男（笑）“ストレイド・クーガー”

JK（常識的に考えて）といつてるのは、達也を悪魔の道（笑）に引きずり込んだ

我らがリーダー“御筆秋夫”

ドリルで風邪を治せといつてるのは、この中の常識人であり（マジド）気合で天元突破する男“カミナ”

最初に達也に話しかけたのは、どつかでは伝説だった英雄“ランサー”（ランサーは偽名）

実は我らが主人公？、達也は一日前までは風邪を引いていたのであった。

それが治り、ようやく復活したのであった。

「さて、久々に走りますか

ピキー

「んっ！今何かフラグがたつたような……」

「この感じは……まさか！」

もう既に立っているフラグを感じた達也は後ろを振り向いた。

そこには……。

「なんか、穴が在るんだが……」

そこには があった。

全てを吸い込む丸い穴。

その に、愛車が吸い込まれてゆく。

「あつ、おい！俺の車が！」

「くそっ、俺たちも引っ張られてるぜ」

「くつ、テメえらー大丈夫か！？」

「何とか槍にしがみ付いてる！が、そろそろヤベホー」イチチチチ

「くそが！あの穴め、俺の車を吸い込もうとしたやがって……」テガイ

「しっかりトイレいつとけばよかつたぜ…………」ハラガイテ

「ひりなりや

」

「ひりなりや、車の中に乗れ！  
どうなるかわからないが、逝くだろーKー！」

「…………」

秋夫の掛け声と同時に吸い込まれかけている車に乗り達也以外、車をバックした。

「んっ、どうした達也？！」

「半分吸い込まれてやがる。」

「ハ、なりやケた！ 突き込んでせる！」

自殺行為だ。

秋夫はそう叫び、と窓から顔を出した  
だがもう既に

「うなぎの棒を握る手が、もう少し柔軟にならなければ、このままでは、」

に突っ込んでいた。

今この瞬間、  
氏家達せまいの世界から消えた。

## 第2話・憑依した俺と誘拐（前書き）

前回のエンド

『……何かスリルな事が起きないのかね？』

『おっ、達也、久しぶりじやねえか』

『なんか、穴が在るんだが……』

『たつやああああああああああ……』

## 第2話・憑依した俺と誘拐

何処かの監禁場所

「達也っ！大丈夫か！？」

「おつと、動かないでくださいますか？」

幼い達也を助けようとするナニカを纏った女人と、達也を腕に捕まえているナニカを纏った女人が対峙している。

達也を捕まてる女人は達也を人質にし、助けようとしている女人の人の動きを止めさせている。

「ぐつ、達也を放せっ！」

「断ります……」

断固拒否。

「ハハハ……おねえ……ちが……」

「達也あー……へへっ……ー。」

達也を助けようとしているのは“織斑千冬”であり。  
どう助けようかと思考を巡らせたところで

達也に異変が走った。

「ぐーひ……あがつ……ぐあああ……」

「んつ……どうしたんだ達也ーー?」

「これは……いつたい……」

達也に起こった事を説明しよう。

無限に連なる平行世界のどこかより発信されたもう一人の同じ存在である青年“氏家達也”という存在を、幼い“織斑達也”という器に憑依する。

瞬間“氏家達也”は“織斑達也”的幼い体に合わせて元の体と同じくらいの身体能力に作り変えた。

平行世界の同位体、青年である“氏家達也”が幼い“織斑達也”的存在を丸ごと塗りつぶした。

ここに、氏家 達也は誕生した。

カツと目を開き、辺りを見回した。  
視界に映った映像は何処かの倉庫。  
達也の主觀では謎の穴に自身の愛車であるAW11ー」と吸い込まれ  
ていたのだが、  
その痕跡はどこにもない。

「…………ここは何処だよ…………？」  
「一かなんで俺…抱きつかれてるんだ?」

達也は、後ろから抱きついている人を見た。

そこには

「な、な、なんだこのロボット少女はああああああああ…………」  
「? ? ?」

「うるさいーすい黙れ！」

達也を捕まえてる女が怒鳴り、そして達也を強く抱き締めた。

「あわせだつたよ、じーだ……？！？」

「たつやあーーー貴様あつーーー」

「へへへへへ、わおじりあひの織斑千冬?」

痛い痛い痛い。

達也は悲鳴を上げた。

普通の女の力じゃない位の締め付けで体中に痛みが走る。

「ぐおおおおーーへそつ、放しやがれーーー！」

「へへへ、じつやつて抜け出そうとこうのだ

！」の最強の兵器“IS”からー「

“IS”?

頭によぎったのは。

b e 動詞の変化形の一つ。

アイスランドのISO国名コード。

アイドリングストップ（idle ing stop）

IS / 男でも女でもない性 / 。

インターバル・シグナル（interval signal）  
アルテッサ

レクサス・IS

だがこんな口ボットのようなモノ、頭によぎった物に全然当たはない。  
そういうじてゐ内に締め付ける強さが上がり、痛みも増した。

そして遂に達也はあるバカな行動に移した。

「何を……」「ほあつ……！」

肘をISという機械に向けて放った。何かが肘に当たつたがそれを破り、キッチリ肘を当て、拘束が緩んだ隙に地面にダイビングした。

「おっし、ナイス着地だ！」あつーー！」

モントリオール

見事にズッこけた。

それはもう盛大にズッこけた。

11

「…………」

「いっ……てえ……」

余談だが、達也を見る一人の女人人はジト目だつたりする。  
全身に激痛が走るが普通に耐えられる位の痛さ。  
そして達也は痛みを堪え《こらえ》立ち上がり相手を見て拳を構えた。

「はあ、仕方ない

」

「第一ラウンドの開始だ」

(何カッ口つけてんだろお前はー)

どこからか秋夫の声がした。



## 第2話・憑依した俺と誘拐（後書き）

達也「少々急展開過ぎてサーチン」

ランサー「それは善として、この過去編はあと何話続くのかを教えやがれ」

達也「そりだな……あと4話は続くと思つぜ」

クーガー「先が長いのは嫌いだぜ」

達也「そんなにスピードを求めすぎるなよクーガー」

カミナ「クーガーからスピードを失くしたら何が残る？  
俺から気合を失くす事と同じ」とだぜ」

達也「ま、たしかにそうだが……」

秋夫「といつわけで次回・HSとの初戦闘（子供の姿で）  
イグニッシュョンだろ！！」

### 第3話・HUTとの初戦闘（子供の姿で）（前書き）

達也「今日はバトルに力を入れたので話が少々短いです」

## 前回のISは

『達也つ！大丈夫か！？』

第一ラウンドの開始だ』

### 第3話・HISとの初戦闘（子供の姿で）

「第一ラウンドの開始だ」

その言葉とともに達也は素早く飛び掛り女に向けていつの間にか持っていたナイフを振るう。

それに対しても女は自身の『HIS』トライ・ブレインの特殊装備『ブラスター・ビット』

（通常BT兵器のビットを五機射出、ビットにエネルギー・レーザーを撃たせ自身も

右手の漆黒の特殊炎熱刀『ブラック・サン』で達也を狙う。

だが達也はその猛攻をすべて避け、あるいはとかナイフでHISの右肩を傷つけたのである。

「なぜっ！？」

女はその光景に驚かずにはいられなかつた。

I絶対防御があるHISを、あんな小さいナイフ一本で傷つけられた事と

BT兵器を糸も簡単にかわす。

それはどう考へても無理な芸当だ。

しかし達也は違う。

達也は元の世界でさあさまな修羅場を経験し、更に自陣もBT兵器を使用しているのである。

ISに傷をつけるという事は説明できないが。

事実、達也是今も避けつつナイフで女に反撃していた。

女は焦っていた。田の前のこんな子供がここまでやるとほ思わなかつたならだ。

女が達也に対し油断をしていたか。それは嘘とは言いかれない。何故なら、まだ子供だからだ。

「のままではエネルギーが尽きる。接近戦で仕掛けようともナイフで斬り刻まれるか、首を刈り取られるかだ。そしてこの膠着状態を先に破ったのは達也だった。

ナイフの刀身を起こしてレーザーを躊躇つつ女に突撃する。女はビットを自分の前に集中させ弾幕を張り、その間にブラック・サンにエネルギーをチャージし、達也を衝撃波で吹き飛ばそうとするが。

達也はビットを全て破壊し、女の田の前にまで接近しナイフを振るう。

「くわつー。」

辛うじてブラック・サンで受け止めるもその一撃が重く後退してしまう。

その隙を逃さんとばかりに達也が追撃を仕掛けた。

### 閃華・決死零刃

女の間合いを一気に詰め寄り素早く一閃した。  
一閃した場所は丁度胸のバーツで、そこはもう既に綺麗さっぱり破壊されていた。

### 第3話・I-sとの初戦闘（子供の姿で）（後書き）

秋夫「バトルに力を入れたのに何故こんなにも短いのかをk w s k  
だろ」

達也「事情があつて此処までしか出来ませんでした。だとさ」

ランサー「I-んな調子で大丈夫か？」

達也「大丈夫じゃね多分」

千冬「次回、第4話・達也、千冬に捕まる  
ではまたな」

薄暗い空間に、大きい机に仕込まれたディスプレイの光が照らします。

「全員集まつたか？」

「いや、クーガーとカミナが来てないぜ」

その中に佇む人物の一人、リーダーである“御筆秋夫”が点呼を取り、“ランサー”がメンバーの欠員を告げる。

「OHー、ジャマジャマ。情報を纏めてだから遅くなつたぜ」

「すまねえ、グレンの最終調整をしてたら遅くなつた」

ロングコートを着たサングラスが特徴な“ストレイト・クーガー”の言葉に続く様に空間に入ってきたのは上半身に彫られたタトウ一が目印の“カミナ”。これでこの空間にいるのは四人となり、全員が揃つた事を示した。

その事を確認した秋夫が話を切り出す。

「ブリーフィングを始めるだろ。一週間前、謎の穴に吸い込まれた“氏家達也”の捜索についてだろ。クーガー、そっちの方で何か情報は得られたか？」

「いや、駄目だった。警察のデータベースにアクセスしてみたが今の所達也の目撃情報は無しだ」

秋夫の言葉に、クーガーが情報が無いという事を提示した。それに続きランサーが口を開いた。

「「J」ちのツテにも聞いたがやはり情報は無し。多分だが俺の予測からすると……」

「『達也は』の世界には居ない』だろ?」

「俺もそれを考えてたところだ。第一これだけ探しても見つかならといって事はそれしか考えられないからな」

「やはりその意見が一致するだろ……」

ランサーに続き、カミナ、クーガー、秋夫と意見が一致する。

「じゃあどうするんだよ……。あいつが何処の世界に居るか分から  
ないんだぜ……」

「確かにランサーの言つとおりだぜ。何処の世界に居るか分からな  
い以上俺たちも動けねーぞ」

「…………俺に秘策があるだろ…………」

「それはどうゆうつたあ秋夫」

「……現在開発中の“アレ”があるだろ…………」

「おいおい、まだアレは試作段階だらうが。どうあるんだよ?」

「だからこそだ、急ピッチで製作するしかないだろ……常識的に考  
えて」

秋夫達は作戦を練つていく。達也を助け出す為の作戦を。

「カミナとランサーは今すぐ製作に取り掛かるだろ。完成次第  
と武器と車を乗せて起動し、達也の居る座標を特定し、発進し  
てもううだり」

「「」解した（ぜ）」「

「アレを完成させねば早くいけるだろ」「

「言われるまでもねえぜー。」

「じゃつ、名前持ち場に着くだろー。」

「「「了解ーー。」「

兄貴達は、静かに、そして動き始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6593y/>

IS～インフィニット・ストラatos～別の世界の自分に憑依した青年の大活劇

2011年11月30日21時45分発行